

第2章 寺・神社・石造文化財

長福寺

■長福寺の建立

長福寺は坂田丘陵の中腹、坂田八六一番地の一（字宇和手）にあり、幾星霜ものあいだこの村落の菩提寺として親しまれてきた。境内は九三坪。「龍泉山」と号し、真言宗豊山派に属する。本尊として阿弥陀如来薬師如来地藏菩薩を安置し、弘治二年（一五五六）に僧隆賢によって開基された。四二五年前のことである。

しかし寺伝によれば、その前身である本寺があったという。それは現在の長福寺から南東へおよそ二〇〇メートル先、旧字五龍と呼ばれたところがあり「龍泉寺」と称した。『千葉県君津郡誌』には「平安時代の中期に上総に龍泉寺という寺が二カ所あり」と記されているが、その一つが坂田の龍泉寺であった。



長福寺

その周辺には字名で東五龍、西五龍、大龍、小龍などやたらに「龍」の文字を使用した地名や丘が集中してある。目を転じてその周辺の平坦地を見ると、鐘搗免とか供僧免と呼ばれた田畑もあり、寺家坂という墓地もある。いずれも龍泉寺にちなんだ地名であろうと想像されるが、その広域さからみて当時のこの寺院の威容がしのばれる。

平安時代の初期から中期にかけて上総、下総は上総桓武平氏によって支配されていた。その後、鎌倉幕府が開かれ、寿永二年（一一八三年）の十二月に上総国の御家人・周西次郎助忠という人物が源頼朝に「周西次郎助忠以下本宅に安堵すべし」との恩裁を受け、この一帯を支配した、という。

現在の長福寺住職である諏訪祐慶師によれば、

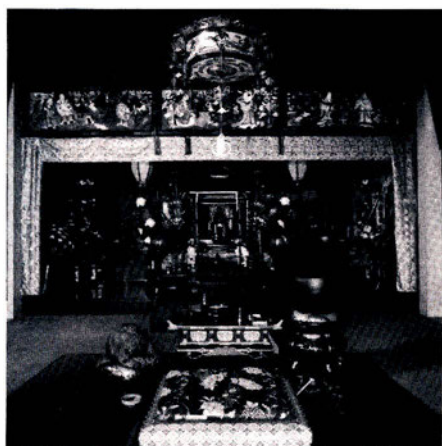
「当時の上総介は上総坂太夫という人物で、周西次郎助忠の父であった。しかし、この坂太夫はこの地にあまり住もうとせず、もっぱら次郎助忠に管理させ、その一族が菩提寺として建立したのが龍泉寺だったのではなからうか。ちなみに「坂田」という地名はこの坂太夫の「坂太」の音が変わったという説もある」という。しかし、これはあくまでも説であり、その真偽のほどは定かではない。

そして時代は戦国時代へと突入、上総一帯は相模の北条氏康と房総の里見義堯の戦場と化した。小糸川畔、三船山、人見山には勇猛な両軍が対峙し、周辺の村落はことごとくこの激しい戦乱にまき込まれた。業火はところかまわず襲い、この坂田の村落でも地獄絵のごとき災難にみまわれたことは想像にかたくない。そして威容を誇った龍泉寺もごうごうたる炎と煙のなかにその姿を崩壊させてしまったのであった。

菩提寺の焼失を嘆いた坂田の人々は、戦乱の沈静化を見ながら、僧隆賢に寺院の再興



第18代住職 諏訪祐慶師



長福寺内陣

をうながした。それが弘治二年（一五五六年）であり、隆賢は一念発起して、現在の地に新たな寺院を建立した。戦国の世のはかなさを憂い、隆賢は人々の長い幸福を祈願し、その寺院を「龍泉山成願院長福寺」と称したのであった。

この再興された長福寺が当時、どの程度の規模をもつ伽藍であったか定かではないが、ただ、その堂宇がいく度かの天災地変に耐えながら江戸時代、八代將軍吉宗の治政のころまで存続していたことは確かである。しかし、その腐朽ぶりははなはだしく、見るも無残なものとなっていた。

■元文三年の再建

元文三年（一七三七年）、いよいよ腐朽に陥った長福寺の再構築は急務となった。しかし時代が悪い。元文年間といえはわが国の経済は壊滅的な困窮にあった時代。甘藷先生こと青木昆陽が幕府に登用され、食糧増産と幕府財政の立てなおしにあたったときであり、とりわけ農民や庶民の生活はまさに飢餓のどん底にあった。

坂田は当時、六〇数戸の農村であったが、その窮状ぶりは決して例外でなかったはずである。

そのなかでの寺院再建。当時の僧有尚の苦悩はいかばかりであったか。一銭たりとも余裕のない村人たちをどう説得し菩提寺を守るか、悩みに悩んだすえ、ついに有尚はおもだった人々を勧請したのであった。その熱心さに心を動かされた人々は、身を切る思いで有尚に賛同し、それが村全体に広がり、どん底のなかでの長福寺再建が衆議一決をみたのであろう。元文三年に平屋、茅葺きの五六坪の本堂が完成された。総つが柱の方



地蔵堂墓地

形作りで、当時の状況から推して想像もつかないような立派なものとなった。

幕末のころ、屋根は瓦葺きに替わり、向拝四坪半、奥の院四坪半が追造されたが、しかしその主要部は実に二世紀半もの歳月を保ったのであった。

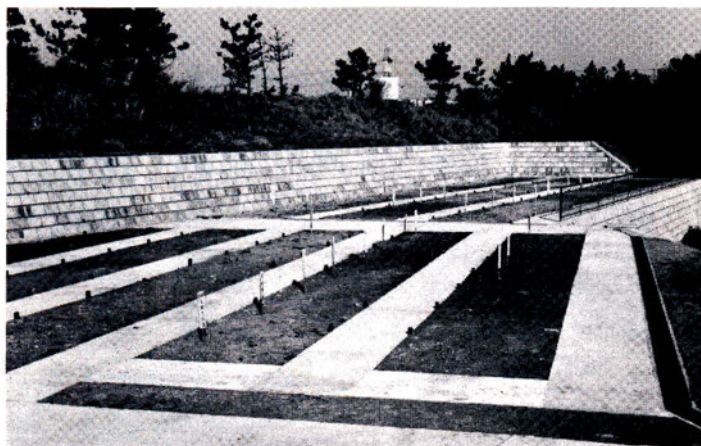
阿弥陀如来薬師如来像は宝暦十一年（一七六一）に献納された。発願人は富左エ門御袋、喜左エ門内方など婦人が中心となり、地頭・小笠原熊之助、家老・大草三郎左エ門をはじめ、名主、年寄などおもだっ人を説得し寄付をあといで実現させた。そして昭和のはじめまで、この長福寺は人見にある青蓮寺の門末に一樓格という格式で、末寺二五カ寺の首位に位置していたのである。

■戦後の再建

星移り住む人々も代わって昭和四十四年、長福寺は二度目の大改築が行なわれた。建設委員長に小野近之助。坂田から一〇名の委員が選ばれ、総工費一〇〇万円があてられて新構築された。建設費は寺有山林の処分および坂田漁業協同組合をはじめ檀家の寄付によってあてられた。

その後、昭和四十九年の七月七日、長福寺は夜来の集中豪雨を被り、庭内の南面土手が約二〇メートルにわたって崩壊した。この復旧に費やした費用は三三〇万円、寺所有の山林の一部を君津市に売却してその資金にあてた。

長福寺墓苑は昭和五十五年九月に本堂裏手の眺望絶佳の高台に七六区画が完成し、ただちに檀信徒の入園申し込みの受け付けを開始。第二期工事も計画中で、待望久しかった「長福寺墓苑」もいまようやく緒についたところだ。



長福寺墓苑

なお昭和五十六年秋には本堂西側に二五坪の客殿兼厨房が新築され、住民の激増に対応すべく努力が続けられている。坂田土地区画整理組合を中心に檀信徒の寄付によって約一〇〇万円を投入し完成されたのであった。

坂田八幡神社

「坂田八幡神社」は境内の面積が約三〇〇坪、菅田別尊を祭神として元和二年（一六〇六年）二月十三日に創建された。

旧君津郡下には菅田別尊、すなわち応神天皇を祭神とする神社が実に五一社もあるという。上総の地の支配者たちは応神天皇をよほど尊崇していたものと思われるが、坂田八六三番地（長福寺の上手）にある八幡神社もその一つであった。

古文書によれば、八幡神社が創建される以前にも神社らしきものがあったという。字古八幡というところに置かれたようだが、その由緒や規模のほどは定かでない。ともかく徳川家康が没したころ、この坂田でも神社建立の熱があがっており、社殿らしきものもないままに元和二年を創建の年と定めたのであった。

社殿が建立されたのはそれから一〇年後の三代将軍家光の寛永年間（一六二四〜一六二八年）の頃に下る。明治末年までの社殿は茅葺き屋根の簡素なものであったが、その間にも幾度の風雪にさらされ朽廃しては、再建されたことであろう。大祭は秋の十月十七日（のちに十月十五日となった）に行なわれた。

文化文政の年代だと思われるが、古文書には、この八幡神社にまつわって一つの事件



坂田八幡神社・一の鳥居

■神社総代（昭和五十六年現在）

坂井 伊之松

安藤 万次

本間 宗吉

氏子会長・安藤 正

が起こったというエピソードが記されている。

八幡神社には秋の大祭のほかに夏の八月十五日（陰曆）にも氏子だけの小規模な祭礼があるが、このとき、村の若い衆がお上の許しがないのに内宮をかつぎ出し、本名輪海岸まで勇んだのであった。神社の再築が完成し、それを祝っての行動であつたらしい。

しかし、若い衆たちは興に乗ったのか「神馬」（秋の大祭のみ出馬する）までかり出して、あたかも大祭のときのように村中をねり歩いたのである。

しかもその内容がまた神輿とそっくり。村のおもだった人や氏子代表などはさすがに気になって注意したが、もう走り出した若衆の耳には入るものではない。時ならぬ神輿行列はたちまちのうちに御陣屋に知らされてしまった。いうまでもなく、当時は幕府や支配者の統制を侵害するような集団行動はいっさい御禁制であつたからたまらない。さっそく村役人たちは江戸の御陣屋役所に呼び出されてしまったのである。ことのでん末を調べられ、さんざん絞りあげられ「今後は神輿とまぎらわしい勇みは固くいたしません」という誓書を差し出して、ようやく解放されたという。

ちなみに、神輿の古い格納庫から発見された板額によれば、神輿は文化十四年（一八一七年）八月に上飯野村の大工・忠五郎に依頼して再造成、さらに弘化二年（一八四五年）八月に再修理が行なわれたと記されている。

明治四十三年には西五龍にあつた「祇園神社」、「巖島神社」を八幡神社に合併し、また昭和十八年ごろ海軍道路の新設にともない、字一の壺にあつた「白山神社」を境内に移祀した。この「白山神社」は井祐吉久家の持ちものであつたが、かつては「白山さま」と呼ばれ、坂田の人々に親しまれ、崇敬されていたものであつた。「坂田八幡神社」の別



本殿内部と宮司宮崎正男氏

■祇園神社と巖島神社

祇園神社（無格社）は間口一間三尺、奥行一間二尺で、西五龍八六九番地に所在。

巖島神社（祭神市杵島姫命）は間口一間、奥行一間。

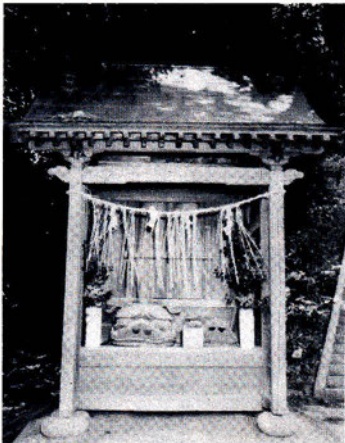
当寺はいうまでもなく「長福寺」であった。昭和五十六年時の宮司は宮崎正男である。ちなみに、八幡神社は大正年間に村社に昇格したが、終戦後、これは廃止された。

■境内の小祠三棟

昭和五十四年まで「坂田八幡神社」境内西側には二棟の小祠が東を向いて建っていた。いずれも奥行き、間口が一間（一・八メートル）で、それに関する文献はいっさいない。ただそのなかを覗き込むと、北側の小祠は左右に仕切られ、向かって右側には一片の小板があり、それによると「古八幡神社」を再興したという形跡がうかがわれる。明治二十三年庚寅二月〇日、人見の大工石井桂造が当たり、世話人として青沢吉弥、荻込兼治郎、安藤仁平、安藤半九郎の名が墨書され、他面には「古八幡神社 一字右為天下泰平殊郷中安全也」と記されている。向かって左側の小祠には朱塗りの天狗面（縦二三センチ、横一六・五センチ、台付、木彫）が安置されており、「牛頭天王」と書かれた小木片に、「明治七庚寅歳二月大吉祥日上総周准郡坂田村惣願主」と記されたものが置かれてあった。また南側の小祠には三猿（みざる、きかざる、いわざる）の小さな木彫像が安置されており、ほかに装飾用の木彫も二つ付置されているが、これは庚申信仰のあらわれと見るべきであろう。

しかし、五十四年秋の二〇号台風でこの二つの小祠は倒壊してしまい、いまは一つの小祠堂にまとめられている。

また社務所の近く、後述の「浅間神社」に登る石段下の西側にも小祠一棟があり、御神体とおぼしきものとして「天照皇大神宮」の御幣が祭ってある。その由来はまったく



小 祠 (天照皇大神)



八幡神社境内の小祠 (昭和54年)

不明であるが、祠内にはかなり古い木彫の獅子頭二つが蔵されており、「天照皇大神」を奉祭したものと推察される。

その他の神社と御堂

■坂田浅間神社

「坂田八幡神社」の端を登ると小高い丘の頂きに「坂田浅間神社」がある。万延元年（一八六〇年）庚申年六月吉日に篤信者たちによって奉祭されたという。その二年前の安政五年（一八五八年）は日本の国中には悪疫が大流行し、この坂田においても例外ではなく村人たちは非常に困惑し、さまざまな祈願のすえ、ようやく納まったと古文書には記されている。そこで篤信者たちが相寄り、相談の結果、駿河国富士山頂普賢岳の岩石を請い奉ってご神体とし、「坂田浅間神社」を新設したわけだ。これに帰依信敬する者は、悪事災難を除け、五穀成就できるといわれる。

この奉祭については、別当寺を「長福寺」とし、施主は村中となっており、当時の名主・坂井四郎兵衛が金二朱を寄進したのをはじめ、一朱、二〇〇文、一四八文、一〇〇文、四八文、二四文などと村中の人々がそれに続き、そのなかには「長福寺」入口の共同墓地の中央あたりにあった地藏堂の堂守まで四八文を拠出している。

当時の村のおもだつ人々が次のように名を連ねている。

名主 四郎兵衛



坂田浅間神社

組頭 市右衛門

発願人 秋元治右衛門

組頭 六郎右衛門

組頭 甚左衛門

組頭 五郎兵衛

百姓代 忠七

なお「大草直右衛門様」より金一朱と酒一斗を御肴料として奉納された」とあり、この人がおそらく当時の家老役であったと思われる。

■西五龍の「薬師堂」

古老たちの語るところによれば、字西五龍の安藤喜一郎旧宅とその西隣りの安藤史郎宅の裏山裾のところに「鎮守八幡大神宮薬師堂」が建っていたという。その近辺には堂守をしていたと思われる人たちの墓石が、北側の字古八幡との境界をなす山道のあたりに四基ひっそりと建っている。その墓石に刻まれている年号を見るとかすかに「延宝…」とあり、およそ三〇〇年前のものと思われる。

また、この墓石の一メートルばかり東方には小さな塚らしきものがこんもりと盛りあがっており、人々は「行人塚」と呼んでいた。そして、その西側には小池のくぼみの跡がわずかにしのばれる。この「薬師堂」は「長福寺」の住職諏訪祐慶師によれば「おそらく戦国時代に創建された」と推定しているが、相当に立派な建築様式で五間四方もあつたものと思われる。

それは明治の末ごろまで残されており、そのころはもう村の若衆たちの格好の遊び場



白山さま

に化していた。

■坂田の「弁天宮」

文政二年に作成された古絵図をみると、字宇和手の「長福寺」本堂裏山の八幡神社本殿から一〇〇メートルばかり西方の小高いところに弁天宮があったことが記載されている。それには「池之内弁天宮」と書かれているが、ほかはなんらの説明も付記されていない。現場に立ってもそこには礎石の跡も見当たらないため、さしずめ「ナゾの弁天宮」といったところであるが、古絵図にわざわざ記載してあるところから判断して、決して「幻の弁天宮」でないことは確かである。

■五龍神社

字東五龍の牧野小一郎宅の東側山裾に「五龍様」と呼ばれる小祠が祭られている。伝承によれば、その昔、家号「善兵衛」家の者が海で手繰り漁をしていたとき、木の切株が網にかかった。ところが、それは捨てても捨ててもかかってきて、不思議に思ったその男がついに拾い上げ、その木の切株をご本体として祀ったという。昔の人たちの素朴な信仰心がしのばれる言い伝えだが、このとき村人たちが、どんな動作で何を語り合ったかを想像してみると興味はつきない。

■坂田の「山神さま」

山神さまの由来がどういうことであったのか不明だが、おそらく原始的な山岳信仰が



五龍神社

■五龍神社の小石柱

この神社の小祠の前方左右には小石柱が建てられている。右側のものには「天明七年九月吉日」とあり、左側には「願主大前氏」と刻まれているが、大前とは大牧新左エ門のことであろう。

しからしめたものであろう。

坂田の山神さまは四つある。

一つは字当神免の茂田方の山林頂上。高さ八〇センチほどの伊豆石のようなものに「寛政四子年十一月吉日」と「山神宮」との刻字が入っており、そこに山の形をした笠石が載せられている。

二つ目は字原の平野竹治宅（家号「喜左えむ」）の裏山頂上。

三つ目は字仲町の色部一郎宅（家号「嘉えむ」）裏山山頂。

四つ目が同じ仲町の栗原治次宅（家号「治郎左えむ」）の裏山山頂。

五つ目は字薊ヶ作の水越賢次（屋号「谷新宅」）所有山林内。

このうち当神免、仲町あたりからは縄文早期に属する土器片が採取されており、縄文、弥生期など太古に人間生活が営まれていたところと推察されるのである。一説には、このあたりには鎌倉時代に武士の見張所があったともいわれているが、いずれにしても素朴な集落の人たちが山と生活を守るために祭ったものと思われる。

■坂田の「水神さま」

字花の井の坂田青年館西側の裏山の裾には「水神さま」が一基祭られている。

坂田は山水が多く、出水のときは村人たちを困らせたものであるが、その災害を守ることに、生活の用水神として安置したと推定される。創られた年代は明らかではない。しかし、周辺の様相からかなり古く、江戸時代のことと推察される。現在でもその辺りから引水して飲料水に使用している家庭もある。



水神さま

石造文化財

■道祖神

道祖神は、塞の神、ドウロク神などと呼ばれ、外敵の侵入を防ぐ力があるとして祀られた。

釜神、中野方面から字高坂を経て畑沢に通じるかつての房総街道。その高坂口にある儀貝久太郎宅の西側道路に面した大樹の根元に小祠があり、その中には一軀の「道祖神」が祀られている。高さ一八センチの台石に像高七・五センチの小さな仏像が二体刻まれている。明和三年四月吉日と記されているから、武蔵上野あたりで百姓一揆が発生した時代に安置されたものである。そのほかに像高二四センチの石造りの地蔵が一体祀られているが、いずれも穏やかな愛らしい風貌である。

■お地藏さま

お地藏さまは釈迦が入滅後、弥勒仏の出現するまでの間、いわば仏のない暗黒時代に登場し、迷いの世界を訪ねまわっては衆生を救う仏であるといわれている。地藏信仰は平安時代ごろから広く普及し、江戸時代になりますます盛んになり、とりわけ庶民の深い信仰を得て道端にまで祀られるようになった。

ここ坂田にも六カ所にお地藏さまが点在し、人々に崇敬されている。人々を極楽に導き、病気を治し、火災や盗難から守るなどありとあらゆる願いごとを叶えるという有難



道祖神

い仏さまということで、今日まで根強い信仰が続いている。

・坂田海岸の六地藏

坂田の海岸が生きていたころ、漁師たちの憩いの場として栄えた家号「安さん」の北側道路端にある六地藏。海苔養殖が全盛のころは村の人々に親しまれ、お賽銭があげられたが、漁業権放棄以降はあたかも一人とり残されたように淋しそうに立っている。高さ八四センチ、横四〇・五センチ、厚さ一四センチと立派なもので、そこには「宝永八辛卯天三月(注・あるいは二月か)吉日 施主坂田村講中」と刻まれている。宝永年間といえは六代将軍家宣の時代。富士山が噴火して宝永山ができたり、將軍の命令で新井白石が「武家諸法度」を起草して諸大名のぜいたくを戒め、通貨改革に努力した時代であり、それから約二七〇年のあいだ、この海岸の六地藏は坂田の漁師たちの変遷を見つめてきたというわけである。

・滝の前六地藏

字滝の前にある本間家墓地入口には六体の六地藏がある。大きいのは高さ四六センチで、一番小さいのが三六センチ。これも宝永五戊子(一七〇八年)十一月九日と刻字が見られるが、村の人々の安全と死者の冥福を祈願して奉納されたものと思われる。

・寺家坂土堤上の六地藏

この地藏さまは寺家坂を南から北へあがった右側、道路から約五メートルぐらいのぼったところに静かに立っている。

左から「おはつ 長七 おいぬ」「施主坂田村中」「金蔵 いぬふち おたけ」「××××(不明)」「千代 おあき 卯三女」「享保庚子五年(一七二〇年)二月十二日 おふい



坂田海岸の六地藏

■宇和手の地藏堂

長福寺下の共同墓地の中央辺りに明治四十四年まで地藏堂があった。それは鎌倉時代に創建されたものといわれていた。江戸幕末ごろまでは堂守が常住し、村人との交流を示す寄付金などを山捐した記録が残されている。

いおき 七之助」と六体それぞれに刻字されている。昔むした石仏は何を語ろうとしているのか、往時の人々の信仰心をよみがえらせるようだ。

・長福寺六道地藏尊と六面地藏

「長福寺」境内に上がると、右側にある僧侶墓地入口のところに六道地藏尊一基がある高さ五三・五センチで、享保四年（一七一九年）に作られ、願主・隆慶と刻まれている。坂田ではいちばん立派な地藏さまであろう。

また境内にあがってすぐ右側に「六面地藏」があり、これは元禄十二年（一六九九年）とあるから、この村ではいちばん古い地藏さまのようだ。高さ八二センチの六角石で、かすかに「教道法×有× 大牧新左衛門 五兵衛 七良左衛門 五良兵衛 奎兵衛奉納 頼 日結」などの文字が見い出せる。かつては地藏堂墓地入口に奉祀されていたものを、後年、現在の場所に移転したという。

・坂田新納戸地藏

高坂霊園の北側道路を距てた新納戸共同墓地入口のところに一祠堂があり、ここには三体の地藏が奉祀されている。

一体は高さ一・二メートルの立像（像高は八七センチ）で、その台座正面には「寛保二壬戌歳（一七四二年）坂田村講中」とあり、その年の十一月吉日に祀ったようである。もう一体は高さが一・〇メートルで、像高だけを計れば五五センチ。その正面には「寒山承椿信土」「全應霜鐵信土」「芳春童子」などの文字が刻まれ、「安永八巳亥（一七七九年）三月吉日とある。

また、もう一体は台座二個の上に像高三七センチの地藏が安置され、台座には、「宝蓮



長福寺の六面地藏

法子位 天保八丁酉四月廿四日「施主 坂田村 久保村」と刻まれている。両村が施主というのは珍しいが、これは両村の村境にあるためと思われる。

・谷地藏

谷墓地の入口左側にはブロック塀に囲まれて四体の地藏がある。

西側から見ていくと、まず高さ四三・五センチ、幅二三・五センチの三面六地藏。

次は高さ一メートルにおよぶ立派な彫刻のある石造物、幅は二八センチもある。

その東隣は高さ三八センチ、幅一五センチの地藏だが、肩から上部は欠損している。

そして一番東端は高さ三二センチ、幅二二センチで、三面の像が刻まれている。

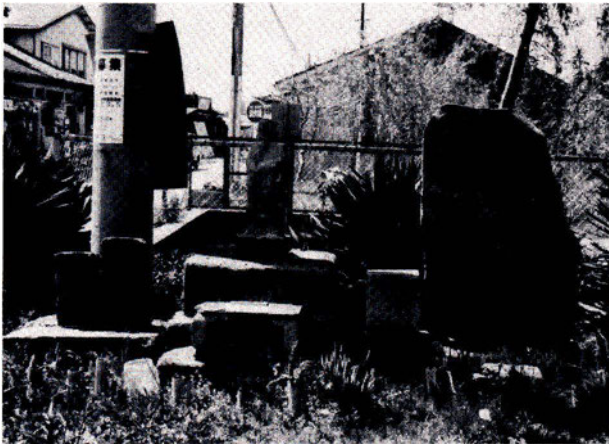
■塔

・花の井の供養塔

字花の井角の西側に一基の供養塔が建っていて、村人たちの信仰を集めている。台座の上に高さ一・二メートル、巾七二センチ、奥行二四センチで、表面には「西国三拾三所供養塔」とある。裏面をみると「天保十五年田辰倉四月二十日 名主坂井四郎兵衛 長福寺宥阿」の刻字が記され、見るからに見事な石造塔である。

・長福寺の宝篋印塔

境内の本堂に向かうと、その右手には高さ五メートルにもおよぶ立派な作りの宝篋印塔一基がそびえ建っている。塔には「寛永十一年四月十二日」に建立されたことがはっきりと記され、そこには「刹妙清禪定尼」とあるところから、その尼僧を供養したものであると思われる。宝篋印塔はもともとインドで発生したもので、わが国には平安中期に伝わ



花の井の供養塔



谷地藏

り、石造物として各所に見られるようになったのは鎌倉時代後期からだ。

塔の作りは、まず基壇の上に基礎が積まれ、塔身、笠、相輪とあがって行く。普通は塔身の四面に四仏の種子を彫るといわれているが「長福寺」の宝篋印塔はほとんど供養塔の意味をもって建てられたようだ。

・坂田の庚申塔

「長福寺」下の地藏堂墓地入口に高さ九八センチ、幅四二センチの三猿を刻んだ庚申塔が奉納されている。庚申塔は数百年の伝統に支えられた信仰のあらわれで、祖先の生活の一端を物語るものである。室町時代の中ごろから庚申の礼拝本尊が考え出され、江戸時代、ことに元禄年間に広く庶民の間に浸透し、念仏講や月待講で供養塔が建てられたように、庚申塔もこれにならったものと推定している。別名「三猿塔」とも呼ばれて、猿を神格化させたものである。

■道標

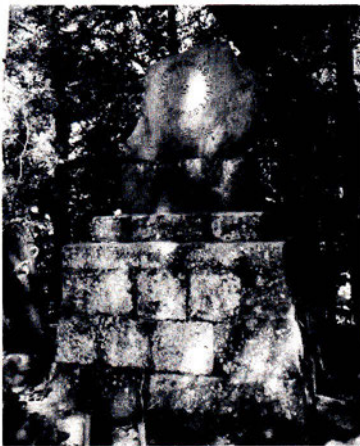
字東五龍と西五龍の間の寺家坂上り口には一基の見事な道標がある。高さ九四センチ、横二九センチ、奥行二一センチの硬質岩で、「天保一五辰亥 施主村中 甚左エ門 嘉左エ門 兵右エ門 作右エ門 治右エ門 金兵エ」の名前が刻まれ、

東 かとう山江 三り半

西 富津江 二り半

北 木更津江 二り

と太字で刻まれている。



長福寺の供養塔



長福寺の宝篋印塔

また、これと同じような道標一基が字高坂の畑沢道入口にもあったが、このたびの開発の際に地下に埋没してしまったのか、いまは見当たらない。

■高坂霊園

坂田には現在、長福寺関係の墓地とは別に高坂霊園がある。場所は、その昔、文化文政ごろから高坂堰（面積七〇〇坪）として地域の灌漑に役立っていたところだが、付近の久保山などの開発に呼応し、昭和五十二年春に地主の坂井五郎氏がこれを菩提寺である波岡寺に寄進した。波岡寺ではこれを高坂霊園として開発、全区画一四八基の近代的霊園を完成させた。宗派を問わず開放されている。

高坂霊園は高台の公園墓地で環境のすぐれた場所であり、駐車場、水道、休憩所の設備も整っており、多数の申込者がある。

ちなみに高坂地区には、波岡寺を菩提寺とする檀家が六軒あり、これはその昔、高坂は隣り村である畑沢に所属していた時代があったためと考えられるが、資料とすべきものはまったく見当たらない。